

【短報】小浜島におけるマルケシゲンゴロウ属2種の初記録

森・北山(2002)では6種のマルケシゲンゴロウ属の種が国内に分布するとされていた。その後、稲畑(2016)によりサメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström, 1997 (以下サメハダと記す)、Biström & Watanabe(2017)によりチュウガタマルケシゲンゴロウ *H. remotus* Biström & Watanabe, 2017 (以下チュウガタと記す)が国内より発見され、国内に分布するマルケシゲンゴロウ属の種は8種となった。

サメハダおよびチュウガタの記録の中には、過去にマルケシゲンゴロウ *H. subtilis* Sharp, 1882 (以下マルケシと記す)と誤同定されていたものが含まれており(稲畑, 2016; 渡部ほか, 2016; 渡部, 2016; Biström & Watanabe, 2017)、過去にマルケシとして発表された記録には留意する必要がある。

また、マルケシは環境省版レッドデータブックにおいて準絶滅危惧に選定されている(環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 2015)。しかし、渡部(2016)が指摘したようにマルケシの記録の中にサメハダが含まれている状況を鑑みると、国内におけるマルケシゲンゴロウ属の分布および希少度を把握するためには既知記録の再検討や正確な同定に基づいた記録の蓄積が重要である。

沖縄県小浜島における水生甲虫の記録は少ないが、松井(1990)によりマルケシが記録されている。この記録が発表された当時には、サメハダおよびチュウガタは国内から記録されておらず、これま

で知られている両種の分布状況を鑑みると、小浜島にもこれらが生息する可能性があるかと渡部は考えていた。筆者の一人吉村が小浜島において水生昆虫の調査を行い、渡部が同定した結果、小浜島初記録となるマルケシゲンゴロウ属2種を確認したので、正確な同定に基づく分布新記録として報告する。

報告に先立ち、文献についてご教示いただいた東海大学の北野忠教授、沖縄県RDB昆虫類分科会委員の青柳克氏、調査の実施に関してご協力いただいた名和昆虫博物館の名和哲夫氏、調査にご同行いただき小浜島の状況についてご教示いただいたはいむるぶしの坂本俊士氏、標本送付等でご協力いただいた吉村裕子氏に御礼申し上げる。

1. サメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström, 1997

4exs., 沖縄県八重山郡竹富町小浜 水路, 28. III. 2017, 吉村採集・筆者ら保管(図1); 7exs., 沖縄県八重山郡竹富町小浜 水牛池, 26-28. III. 2017, 吉村採集・筆者ら保管。

2. チュウガタマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus remotus* Biström & Watanabe, 2017

2exs., 沖縄県八重山郡竹富町小浜 水路, 28. III. 2017, 吉村採集・渡部保管; 3exs., 沖縄県八重山郡竹富町小浜 水牛池, 26-28. III. 2017, 吉村採集・筆者ら保管(図2)。



図1. 小浜島産サメハダマルケシゲンゴロウ♂. 図2. 小浜島産チュウガタマルケシゲンゴロウ♀.

調査を行ったのは、ホテルはいむるぶしの敷地内にある水牛池(図3)、本集落とオヤケアカハチの森の間の低湿地にある水路(図4)の2地点である。サメハダおよびチュウガタは、両調査地点の水際に繁茂するイネ科植物を掬った際に、コマルケシゲンゴロウ *H. acuminatus* Motschulsky, 1859 (以下コマルケシと記す)とともに採集された。チュウガタのホロタイプおよびパラタイプが採集された3地点においても、今回調査を行った2地点と同様にサメハダ



図3. サメハダとチュウガタの生息環境（水牛池）．坂本俊士氏撮影．



図4. サメハダとチュウガタの生息環境（水路）．坂本俊士氏撮影．

とコマルケシが同所的に採集されており（Biström & Watanabe, 2017），これら3種が好む生息環境には類似する点があるのかもしれない。

坂本俊士氏の聞き取り情報によると、小浜島では1950年までは稲作が盛んであり、戦後、食料を求めて多くの人々が小浜島へ移住したため、人口は約1,200名にまで増加した。しかし、1970年から2000年にかけて沖縄本島では観光業が盛んになり、小浜島からは人口が流出した。併せて、サトウキビ畑や放牧の増加により水田が激減したことから、2010年以降には家庭消費用規模で細々で行われる程度にまで稲作は減少した。水田が減少することはサメハダやチュウガタの生息地の一部が消滅するほか、ため池などの管理放棄、湿地環境の乾燥化にも繋がるため、生息環境の悪化が懸念される。

引用文献

- Biström, O. & K. Watanabe, 2017. A new species of the genus *Hydrovatus* (Coleoptera, Dytiscidae) from Iriomote Island, Southwestern Japan, with a key to the Japanese Species. *Elytra*, Tokyo, New Series, 7 (1): 5–13.
- 稲畑憲昭, 2016. サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録. さやばねニューシリーズ, (21): 46–47.
- 環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室, 2015. レッドデータブック 2014 — 日本の絶滅のおそれのある野生

- 生物 — 5 昆虫類, 509 pp. 株式会社ぎょうせい.
- 松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (1). 北九州の昆虫, 37(2): 69–78.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
- 渡部晃平, 2016. 石川県におけるマルケシゲンゴロウ属の分布. さやばねニューシリーズ, (24): 53–56.
- 渡部晃平・富沢 章・稲畑憲昭, 2016. 本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録. さやばねニューシリーズ, (23): 15–16.

(吉村優杏 482-0003 岩倉市曾野町江毛1
岩倉南部中学校)

(渡部晃平 920-2113 白山市八幡町戊3番地
石川県ふれあい昆虫館)

【短報】キガシラタマクスイを北海道で採集

キガシラタマクスイ *Cybocephalus* (*Cybocephalus*) *politissimus* Reitter, 1898 は、ヨーロッパ、ロシア（シベリア、極東地域）、中国（広東省）、台湾、日本（本州、四国、九州、沖縄）から記録されている（Hisamatsu, 2013；久松, 2015）。下記のとおり、北海道にて本種を確認したので記録する。

47exs., 小清水町浜小清水とうふつ湖畔, 2. VII. 2017, 吉富博之の採集, 愛媛大学ミュージアム保管.

道路脇に植栽されているイチイ *Taxus cuspidata* にイチイカタカイガラムシ *Parthenolecanium pomeranicum* Kawecki と考えられるカイガラムシが多く発生しており、その枝を叩き網して採集した。採集個体以外にも多数の個体を目撃していることから、おそらくこのカイガラムシを餌としていると考えられる。他にもヒメアカボシテントウ *Chilocorus kuwanae* Silvestri やチビマルハナノミ属の数種 *Contacyphon* spp. が得られ、それらの種もこのカイガラムシを利用している可能性がある。

末筆ながら、カイガラムシについて情報をくださった田中宏卓氏と、植物の同定をしてくださった河合庸展氏（株式会社環境指標生物札幌支社）にお礼申し上げる。

引用文献

- Hisamatsu, S-T., 2013. A review of the Japanese Cybocephalidae (Coleoptera: Cucujoidea). *Zootaxa*, 3616(3): 253–267.
- 久松定智, 2015. 日本産タマクスイ科 Cybocephalidae (コウチュウ目). さやばねニューシリーズ, (17): 32–36.

(吉富博之 愛媛大学ミュージアム)
(久松定智 790-0003 松山市三番町8丁目234
愛媛県立衛生環境研究所生物多様性センター)